

No. 357【2019年5月24日配信】

『新羅之記録』と浪岡御所(担当:工藤)

こんにちは! 室長の工藤です。

江戸時代の松前藩の藩主松前家の家譜(系譜の一種)に『新羅之記録』^{しんらのきろく}というものがあります。漢文で記述されているのですが、通常の漢文の読み方では読みきれない極めて難解な史料です。それでも、松前藩の成立過程をたどるには欠くことのできない史料のひとつとしても知られています。

松前氏は「安東水軍」で一般に知られている安東氏から独立し、^{えぞがしま}夷島の領主となります。つまり、もともとは安東氏麾下にあり、『新羅之記録』にはしばしば「安東家を家督に仰ぐ」といった記述が出てきます。

ところが、後に松前藩の初代藩主となる^{よしひろ}慶広という人物に関する記述の冒頭に、彼が「三男であるがゆえに浪岡御所に『結属』する」と記されています。「結属」は「けつぞく」もしくは「けちぞく」と読むのかと思いますが、国語辞書には見えない言葉で、恐らくは仏教用語ではないかとみえています。語意は定かではありませんが、強い従属性を感じさせます。安東氏の麾下にあることを「公言」している『新羅之記録』のなかで、あえて慶広が浪岡御所の北畠氏に従属しているとする表現は気になるところです。

注目したいのは、その理由が「三男」だからというところです。長男(もしくは次男)であれば、やはり安東氏に従属(家督と仰ぐ)していたということでしょうか。

私は松前(当時は蠣崎姓)氏は、^{としひろ}慶広が浪岡御所、長兄^{もとひろ}舜広が安東氏と関係が深い、いわば「ふたつの外交チャンネル」を持っていたのだらうと考えています。ところが、舜広は毒殺され若くして亡くなります。また次兄の^{まさひろ}元広も病死し、結果として慶広が蠣崎氏の家督を継承することになります。一方、舜広没後の安東氏とのチャンネルは、慶広の弟^{まさひろ}正広が継承した可能性が高いようです。

その正広は、天正6年(1578)の浪岡御所滅亡を契機に謀反を目論んだといえます。これは、慶広と浪岡御所とのチャンネルが崩壊したことによる企てだったとみえています。ただ、正広の目論みは失敗し、追放されることになります。つまり、浪岡御所の滅亡は、津軽海峡を挟んだ夷島の政治状況を大きく動揺させる一因であったと考えられるのです。



松前藩の祈願所だった阿吽寺
(北海道松前町 2006年撮影)